

国土審議会計画推進部会 住み続けられる国土専門委員会（第2回）（未定稿）

1. 日時：平成28年10月25日(火) 16:00～18:00

2. 場所：中央合同庁舎2号館12階 国土政策局会議室

3. 参加者

（住み続けられる国土専門委員会委員・・・3名欠席）

小田切委員長、谷口委員、藤山委員、広井委員、松永委員、若菜委員

（国土政策局）

藤井局長、北本審議官、深沢総務課長、中村総合計画課長、高柳企画専門官 他

4. 内容

（山口）＜資料確認＞

＜藤山委員挨拶＞

＜松永委員挨拶＞

（谷口委員）＜資料1 「生活圏域から考える住み続けられる国土」報告＞

＜ポイント＞

- ・ 元々交通計画等をやっていた。生活圏域のデータを農村地域も含めて調べたモノはあまりない。通勤通学のデータはあるが、買い物圏域などはなかなか追いかけれない。地方銀行の商圈調査が岡山と茨城であったことから、これを分析した。
- ・ 岡山の県域で考えると、1979年と2000年のデータがある。大まかな傾向として、日常生活で生鮮食料品の購入に乗用車を使うようになり、50%以上増え、徒歩が15%以上減っている。
- ・ 非日常的な生活圏として、娯楽行動全般を見ると以前は県南は岡山市と県北は津山市が大きな県域の中心。倉敷は規模が小さい中心であった。2000年になると倉敷が大きくなり、津山が小さくなっている。要因として高速道路の整備と倉敷に大規模な複合映画館、ショッピングセンターなどができた影響で、現在は倉敷の圏域が大幅に広がり、津山市の圏域が小さくなる変化があった。
- ・ 目的によって圏域が変わってきている。洋服の購入で考えると、若年層は近いところから比較的遠距離まで買い物に出かけ、老年層は住んでいる地元で済ませる傾向で行動様式が変わっていない。
- ・ 1979年の段階では5万人規模の津山、高梁、新見などの地方の中心都市が機能していて、日常的な買物は自分のエリアの中で完結していたが、2000年になると、モータリゼーションの発達で娯楽は県の中心とし、買い物は地域中心都市まで行ってしまう。
- ・ 何故そこに行くかの理由を聞くと、家電について調べると1979年は新設、サービス、品質がよいというところ。2000年は値段、駐車場がある、品物が豊富、というのが理由になる。家電量販店型の思考が変わってきたのがよく分かる。「人が接する形のサービス」が縮小傾向にあるのではないか。百貨店もそういうサービスを販売員がやっていたが、世の中からそういうモノが失われてきたのではないか。

- ・ 「稼げる国土」が別の委員会であるが、その考えだと家電量販店型ということになり、「稼がない国土」という感覚で考えていくのがポイントになるのではないかな。
- ・ 茨城の県域について。1970年から2014年までの調査。途中で設問が変わっているので厳密な比較ではないかもしれないが、買物の中で食品の地元吸収率を見ると、車を使うことが増えた影響と考えられるが、地元で買う比率が大幅に減少。昔は徒歩が50%ぐらいだったのが、今は車が95%。県北の中山間地区からの流出が顕著。
- ・ 衣類も特定の土地に流出している。都市間の力関係も変わってきており、県南では土浦が中心だったが、今は筑波。県北では日立市が人を集めていたが、産業の衰退とともに水戸に取られている。
- ・ 都市構造可視化スコープを使わせていただいたが、状況がよく分かる。見える化するとよく分かるのではないかな。
- ・ 常陸太田市は、4つの市町村が合併した市で、小さな拠点のようなモノを入れ込んでいくとどうなるかという検討をしたモノ。地元アンケートを採って、どこに出かけているか、という事を聞いたが、食料品は常陸太田の町中にほとんど行っている。旧役場の当たりを拠点にしたいと地元で考えているようだが、街を飛び越えて、南部の中心まで出かけることが多く、途中の街はATMの利用ぐらいしかない。
- ・ 小さな拠点に関して、いろいろ条件設定があると考えて、市町村が決めた考え方と、施設がコンパクトにあれば、ネットワークが無くてもよいか、あるいはネットワークをかませて便利にするとうどうなるか、等について検討した。モノが無くても例えば住民のつながりという意味でコトの視点から検討した。
- ・ いくつかパターンを出したが、実際に施設があるところはどこかということ、場所が微妙に違って、バイパスができたところに店ができています。ロードサイドに細長く小さな拠点を作ってはどうかという話し。お祭りの参加者の割合で見ると、中心地は全然違うところが出てきており、有効に使えないか考えている。
- ・ ネットワークは拠点から10分到達圏を后背地とした場合と20分とした場合を考えた。その人達が必要な機能がどこにあるか、という事で、必要な拠点の数はおよそ6割減ってくる。どこの拠点も小さな拠点を作れば人が来てくれると思っているかもしれないが、ネットワークが便利になると他に逝かれてしまう、という事もある。
- ・ ローカルなところがどのように勝負していけば良いのか、岡山大にいるときに藤山委員とも議論したが、ローカルな資源は様々あって、東京が排出するCo2を地方が吸収する構図。環境バランスという言い方をしているが、あまり認識されて居らず、比べたらどうか、と言うことでやってみた。どれだけ自治体が住んでいる人の環境負荷を吸着できているか、という事を試算した。都市部では環境負荷が大きく、超えた部分を地方が負担してくれている。それは国外だったりするが、国内で収支が分かるところでキャップアンドトレードと言うことで計算してみた。東京は年間1100億円分ぐらい外に出している。津山は年間76億円くらい吸着している。そのくらいもらってもいいのではないかな、という考えで、興味深いことに地方交付税の交付割合に相関が高い。地方交付税はただでもらっているという悪評があるが、環境負荷のタックスを出しているところから

取っているという議論ができますよ、という話を津山でやるとみんな喜ぶ。都市計画マスタープランにも入っている。

- ・ 人口減少に負けない地域にしていくことを考えると、参考資料 2 にもつけているのでデータを見て欲しい。参考資料 5 にはデータとは関係ないが、都市と地域の問題を絡めて生物学の進化論の話を書いている。人口減少しているローカルエリアをハトに例え、タカと対決すると一対一では負けてしまうが、長期的に見るとタカの方が絶滅しやすい。そういう意味では「進化的に安定な地域」と言っている。タカとハトの生き残り戦略と言っているが、生態系ではタカの方が上ではあるものの、何かあったときに生きていけないのはタカの方で、ハトの方が強かったりする。都市と地方も同様の関係で有り、地方の方が強く、安定していて、「進化的に安定な地域」と言っているということ。

(高柳企画専門官) <資料 2 「「住み続けられる国土」の地域構造の変遷について」説明>
<内容省略>

(山口補佐) <資料 4 「沼尾委員提供資料」説明>
<ポイント>

- ・ 戦後の成長期から安定期を過ぎ、人口減少期に入った状況で中山間地域の居住者の減少が顕著。日本社会は今後食糧の安定的確保や、国土保全、水環境保全などの必要性の増大、自然災害への対応など、多くの課題を抱えている。こうした事柄を見据えつつ、国土の将来について大きく分けて 3 つの視点から考えた。
- ・ 一つ目として「国土保全の将来」。一旦開発した地域をどのように保全していくか。集落で自主的に行っている道路などの維持管理が人が住まなくなることによってできなくなることの影響、不法投棄の防止や人が居住することで水源や森林の保全に繋がることもある等、人が定住することの意義や可能性について検討が必要。
- ・ 二つ目として「ライフスタイルの多様化と「田舎の暮らし」」。大都市圏と地方部の暮らし方に大きな違い。大都市圏ではお金さえあれば生きるための術などを知らなくてもサービスは受けられ、生活はできる。地方ではその逆のところがあり、知恵や技能を磨いて地域の風土などを活かしたものづくりなどを行う、ということを地方の人が始めたり、やってみたいという人たちが地方圏に移住する動きもある。多様な暮らしのスタイルがあることが生活保障や豊かさに繋がるとすれば、もう一つのライフスタイルを提示できる農山村の暮らしを守る意味は大きい。最近野菜の宅配を定期的に直接農家と行う「マイ農家」のシステムが流行していて、あるいはその先の考え方としていざというとき頼りになる「マイ田舎」を持つなどの考え方もあるのではないかと、とのこと。
- ・ 三つ目として、「食料・水・エネルギーの安定的供給」。世界情勢が不安定な中で、食料、水、エネルギーは本当に未来永劫安定的に供給されるのか。日本国内の水源地域の保全や、食糧供給基地、自然エネルギー生産基地としての農山村の維持は無視できないと考える。

(小田切委員長)

- ・ 論点整理に付け加えるべき話題を出して頂いたと思う。
- ・ 各委員、あるいは事務局からご発言を。

(藤山委員)

- ・ 谷口委員の意見にはいつも刺激を受けている。個別最適を積み重ねることが全体最適になるのではない、という事の逆説をいつも言われるので勉強になる。
- ・ 住み続けられると言うことはこの地域、分野、特定の時期でよければ良いと言うことではない。住み続ける要素も自然、経済、暮らしがある。三つで成り立っていて、経済だけ大きくてもいけない。
- ・ 議論したいのは、都市と地方の関係では大きな渦に収斂していこうというモノがある一方で、地方の内部でも小さな渦が残っている。全体としてのトレンドは大きな渦に収斂しているかもしれないが、このまま進むとどうなるか、全体最適になるのか。長いスパンで考えると重要。
- ・ 昔はそれが最適と考えて、都市近郊でも多くの団地を作っていた。2週目に入って先が見えなくなっている。むしろ田舎より都市の方が持続性が見えない。中心地が一色に塗りつぶされていくような話になると、植物も一面にびっしり生えてしまうと、デットセンターというモノができて、その中心部分から枯れてしまって多様性を作り直そうという動きが自然界には起きる。
- ・ 参考資料にアポトーシスの話があったが、このまま進んでいくのか、あるいはどこかで重大な破局ということになるのか、谷口委員にお伺いしたい。

(谷口委員)

- ・ 単純に行くと大きな流れでは破局に向かうのではないか。
- ・ 京都の書家に石川九楊さんという方が居て、しばらく前に新聞で破局に向かうのではなく、既に破局の中にあると。それはそうかもしれないと思ったが、人の立場によって違う見方になるかもしれない。置かれた立場の中で、その渦の見方を変えていくことを考える役目が与えられているのではないか。
- ・ アポトーシスの話。農村の話だけでなく、むしろ都市の中で起こっていて、がん化している。千里ニュータウンの事例。日経の記事にうまく行った事例と言うことで掲載されていた。古くなったので再生すると言うことで、どうやったかという巨額化して、分譲する部屋をたくさん作ってファイナンスをうまくやって工事費を賄ったという事。大成功という書かれ方をしていたが、そういう考え方を変えていくことが最初のステップと考えている。やはり、地域の中の人口が減少していくというときに、そういうプロセスでは他のところの疲弊が早くなる。右肩上がりの時代の発想かもしれない。
- ・ そうではなくて、海外の事例ではドイツでは「減築」が行われている。ベルリンの10階建てを公共事業で3階建てに減らす改築をやったりしているが、これに公共予算が投じられている。公共は悪玉論が広がっているが、民間では必ず利益が上がらなければならない。単体で黒字を出すと言うことがたくさんある。これを「タカ化戦略」と思っていて、そうではなくて「ハト化戦略」で考えると、生業を確保すればよいので、小さな話しでよく、大きく勝つ必要は無い。そういうスケールで公共事業的なことを、単に批判

するばかりではなく、入れていった方が良いのではと思う。都市側のサイドで活動しているのが少数派なのでそういう話しをする。

- ・ 農村サイドのキャリアがあまりないので、公共的な話しをすると叩かれるかもしれないが、こういった部分はある程度税金で賄っていく必要があるが、こういったことに税金を投入していくことについて社会的な合意がないと、大きな渦から抜け出せないのではないか。公共のサポートの仕組みが必要ではないか。

(若菜委員)

- ・ 取手の都市郊外の団地の出身で、今は岩手の花巻で活動しているが、茨城県という県レベルで話があって、私も交通をやるので、市町村単位でできるコト、県でできるコト、これを超えていく、公というのが重要と思うが、公の中の階層を、例えば国土という考え方から言うとどう超えていけば良いのか、視点を教えていただきたい。

(谷口委員)

- ・ 大変重要なポイント。考え方はシンプルで、圏域というか、生活圏の範囲で農村部も都市部も考えるべきではないか。圏域で形式的なプランはあるが、権限が無いというのが実際。米国では、**Metropolitan Planning Organization** という考え方で圏域でやらなければならないという問題意識で対応しているが、ほとんどのところが形だけ。サンフランシスコなどではその考え方に入らない町もある。一つ例外がミネアポリス。今はどうか分からないが権限と予算を両方持っている。結局何の名目で予算が使えるかどうかがキーワードで有り、そういう仕組みがあるのが大きいのではないか。

(広井委員)

- ・ 話しの最後にあった「進化的に安定な地域」の話しに興味を持った。藤山委員の文明論も同じく、これからの社会を作っていくかのビジョンに関わるような話と改めて感じた。
- ・ 今日の資料にあったような、逆向きの流れが出てきているという兆しがデータ上で出ていたりするのだろうか。若者の車離れでパーソントリップが逆に縮小しているようなことはないだろうか。
- ・ 話を聞いていて、時代でフェーズがいくつかあり、80年代から2000年代のフェーズの話が中心だったと思うが、その前の60, 70年代はそのとき以上に農村から都市へ人口が移っていったのではないか。工業化というベクトルがあった。80年代から2000年代はそれとは違う次の段階の郊外化、道路政策の影響もあったかと思うが、そういう段階が有り、次のフェーズが出始めているのではないか。その背後にあるベクトルというか、何が力として大きかったのか、という事を見ると展望が見えてくるのではないか。

(谷口委員)

- ・ 「進化的に安定な地域」の考え方はなかなか認めてもらっていない。
- ・ どんなことが起こっているのか、今回のデータでは細かいところは分からないが、みんな動かない、出歩かない、という問題。都市部も含めて。一人当たりのトリップが減っていると思う。まず、ネット依存かと言えば利用状況も見てみるとそれも違って、ネットをやっている人はネットを使って動いていて、何もしない人は動きもしない、という状況。正規雇用かどうかと言う職業が影響している可能性はある。活発じゃないよ

うになっているのは、受け入れる町側で出歩く場所がないのではないか。

- ・ 広井委員のフェーズの話とも関連していて、ネットが出てきたときもフェーズになっている。行動が変わっている。自動車の普及も大きな流れになっていて、所得との関係もあるかもしれないが、車も世帯毎に一台所有だったのが複数所有になり、バラバラに活動してそれに対応して郊外に出て行くようになっている。車の発展と裏表の関係かと思う。
- ・ フェーズで見るといろいろなことが見えてくるので、もっとスライスしてみると参考になることが多いのではないか。

(小田切委員長)

- ・ 「低活動化」という言葉があったと思うが。

(谷口委員)

- ・ 正式な言葉は別の言い方だったと思う。調べてみる。

(松永委員)

- ・ 消費行動と生活圏域の空間軸と経済軸のお話、非常に興味深かった。ネットの影響について伺いたい。例えばアマゾンでは今、お急ぎ便というのがあって、本以外でも一億種類以上あって、食料品などその日に受け取れる人口が8割に達しており、そういう意味では生活の条件がフラット化しているのではないか。
- ・ 一方で、岡山県の笠岡諸島行ってきたが、移住した人はアマゾンを活用していたが、元々住んでいた人たちは全く使っていなかった、という事があった。活動行きというか、ネットを使いこなして場所をフラット化して、田園回帰して、都市農村交流を頻繁にしている人とかは、実は二層化して階層にデバインドされているのではないか。所得から見るのが良いのか、雇用形態からが良いのか、場所のフラット化とリンクしているのではないかと考えたが、その辺りを教えて欲しい。

(谷口委員)

- ・ フラット化の議論は非常に重要なポイント。仰るとおり、ネットのフラット化もある。岡山の地図も見ていただいたが、高速道路外気渉っていて、交通インフラもフラット化していると考えられる。1時間半圏になった、というところも遠いところのように思うが、昔は5時間ぐらいかかっていただろう。辺鄙なところでもアクセシブルになったこともフラット化だと思う。両方ある。
- ・ 所得や雇用形態等様々なファクターが関わっていて、年配の人でもネットを多用している人もいれば、若い人でも全く使わない、という人もいる。入り交じっていると思う。ネットフレンドリーかどうかでかなり変わってきている。
- ・ 一つ注意しておきたいのは、筑波に友朋堂という良い本屋があったのだが、とても繁盛していたのだが、あるとき突然廃業してしまった。その理由が本屋ではなく取次店の倒産だった。大手の本屋は大手の取次店はまだ大丈夫なのだが、3番手、4番手の少し小さな取次業者はそういうネット通販の影響を大きく受けたりする。そこがやめると町の本屋さんやられてしまう。ネット化の影響はそういう形で間接的に影響を受けるケースも出てきている。町の中に滞在できる場所がなくなって行ってしまう。フラット化で

ローカルなところがプラスになるところもあれば、しっかりしていた構造を融解することもあるという例。

(小田切委員長)

- ・ 資料 2 について御議論いただきたい。

(若菜委員)

- ・ 資料 2 の 18 ページ。こういう議論をするのか、という事で三点ほどお話ししたい。農村をかわいそうに思って考えてくれるのは良いのだが、という話。岩手でも消えていく集落は有り、大体は戦後開拓されたところから消えている。無理に入ったのではないか。長いスパンで論じていた大体が、戦争と戦後の高度経済成長自体が異常なモノだったのではないかと思える。60 年代辺りと比べると人口は減っているが、明治の村とか藩の石高とかと比べてどうなのか、ということ。農山村が消えていくのはある意味自然なこと、無理して開拓して入ったところは結局消えて元の姿に戻ろうとしているのではないか。そういうところでも住み続けてもらいたい、という議論はちょっと巨視的すぎるのではないか。
- ・ 住み続ける国土専門委員会と言うことで話をしているが、日本の隅々まで住み続けるという国土を目指すのか。対流、交流に落としていくことを考える以上、隅々まで住み続けるという議論になっていると思うが、人口が減る中で私は決してそうではないと考えている。農村がただ無くなってもよいのか、というと環境、食料生産、文化的な多様性など様々な議論が出てくるのでは内かと思っている。
- ・ 林業を見てきたが、大きなトレンドとして人と土地が切り離されたのではないかと考えている。今農村に一番多いのは 60~70 代。20 年も経つと居なくなってもっとフラットになり、今の高齢化の問題はそのくらいになれば解決するのでは、と少々乱暴な考え方もかもしれないが。
- ・ 70 代の人たちに聞くと、生まれ育ったところで死んでいくのが普通というか、国土に人を貼り付けたのは明治政府だったが、今は選べる。人と土地が離れた国土でどういう状態が望ましいのか、そういう視点の議論も必要ではないか。もう少し大きな議論が必要では。
- ・ 国土の形を考えるのであれば私が自由に町を作って良いと言われたら、線と点で作りたい。交通も分散するより線上に密集していれば社会的コストが低い形にできたのではないか。昔の街道沿いに人が住む形。そういう議論も面白いのではないか。その辺りを整える議論をしていただきたいと考えた。

(小田切委員長)

- ・ 新たな提案も頂いたが、事務局提案と必ずしも対抗的ではないと考えた。対流促進型国土という前提で考えればそう矛盾なく議論できると思う。

(谷口委員)

- ・ 先ほどの正式な用語は「活動格差社会」という用語。この言葉で提唱されたのは、豊田都市交通研究所の西堀さんという研究員の方。
- ・ 事務局資料では 12, 13 ページ。不便かなと言うところに継続的に人が入ってきている

ことに着目したい。情報としてはよいが、因果関係としては何故そうなっているのか、についても突っ込んで知りたい。そこにヒントがあるのではないか。

- ・ 18 ページのドローンやウーバーが救いになるかの話。ドローンはまだ未完成なものであり、配達などもまだちゃんとできるかどうか分からない。一方でウーバーは入ってくる可能性が高く、中山間にはあった方がよい。問題は個人の好みで行きたいか、という事であり、タクシーは呼ばれば業務上乘車拒否はできない。夜中に読んでも誰も来ないでは使ってもらえないのではないか。最低限のサービスをしっかり提供できるかどうか課題と考えている。

(藤山委員)

- ・ 谷口委員の意見、何故ここなのか、というところは自分たちの暮らしというか、スタイルの土台を選び取っている、そういう地域が選ばれていて、住民や役場のパフォーマンスで有り、距離要因がどんどん消えていっているのではないか。

(谷口委員)

- ・ 遠隔地でなくても中途半端な場所は減っている。そういうところでもうまくやればよいのだろうか。危機感が強いから覚醒したのだろうか。

(藤山委員)

- ・ そういう縁辺部の方が小さい渦を作りやすいのではないか。
- ・ 住み続ける、という事は非常に難しい。逆から攻めても良いのでは。どういう風に死に絶えるか、という事かと思う。どこかが一人勝ちすると周りが死に絶えてしまい、一人勝ちのところもいずれ死ぬ危険性がある。端は達者でも中抜きされてしまう。農山村は元気なのに、地方都市の方が死のうとしている。フラット化の話があったが、どこでも一緒だとそこに住む必然性がないので、地域は死んでしまう。
- ・ 精神的なモノだが、農山村に住んでいて実感しているのは、「記憶のリレー」というか、地元で一番大切なのは、自分の人生を超えたモノでがんばれることがあるか。そこが地元の生命線。自分だけでやっていると記憶に残らないし、地域もよくなる。自分のところの橋を作った、などのインフラも同じ。そこが一番人材育成で難しい。
- ・ 来た人が感動するのは、何故この人達が自分たちだけでなく後の人たちのことを考えて行動しているのか、というところ。それが凄いと。そういうところが増えている。実際に生きている立場からすると凄く重要な、生き続ける、死に絶えないこと。そういうことを裏返していくためにどうすれば良いか、という論点も逆にわかりやすいのではないか。

(小田切委員長)

- ・ どこでも同じ暮らし、そういう意味では若菜委員ご発言の住み続ける、という事の中身をどう捉えるか、国土の端々まで住むという意味を考えるべきと言うお話と思う。事務局からお話いただけると有り難い。

(北本審議官)

- ・ そこはある意味シンプルであり、地域に愛着がある人が住みつづけられる国土を作ることだと考える。沼尾委員の話にもあった住み続けることによってできる国土管理、若菜

委員が述べられた地域文化、食や生活の文化、あるいは伝統産業を維持することで、日本の多様性を確保する、国土形成計画は文化の多様性を維持することも大きな目的の一つと考えているので、マクロ的に考えると、そういうところに資すると考えている。

- ・ 一方で、人口が減っている地域では住み続けられている人だけでは人が不足している。東京、大都市の人が住みたいと思ってもらえるような地域にしていくことが重要と考えて論点整理させていただいている。
- ・ 論点整理として資料 2 の 18 ページを（例）としたのは、話しの御題として提供させていただいた。先生方のご意向や今回の議論を踏まえて再度整理していきたい。
- ・ 若菜委員御指摘の「隅々まで住み続けられる国土にすべきか」ということについては、非常に難しいところかと思うが、逆に私が感じているのは、日本の国土自体がそう広くないので、人が入り込めないような土地が増えていくことはいかがなモノかと言うことで、できる限り国土管理をし、多様性が維持されるようにしていきたいと考えている。そのあたりは新しい視点でまたご検討いただきたい。
- ・ もちろん住んでいなくても国土管理できる、農業ができるということも考えられる。仰られるとおり人口が減るので、集落が消えていくところも当然出てくる。人手をかけずに管理していくことについて国土管理専門委員会の方でも議論いただいております、併せて御議論いただいてもよいのではないかと。

（若菜委員）

- ・ 農山漁村に住みたい人は住める、という事でよいのではないかと。
- ・ 先ほど議論で出たように、田舎の方でも店が潰れており、先ほどの本屋のように卸が潰れてそうなっている現状がある。論点の一つとして、農山漁村に住んでもらうには、地方都市、今それこそ何の戦略も見いだせないのではないかと。やはり都市と農村だけではダメで、中間の点が必要で、そこをどうしていくかの議論も必要ではないかと。

（北本審議官）

- ・ そこも是非御議論いただきたい。一方で、論点の（1）はまさに遠隔地の話し。（2）は中間的な都市というか、中小都市周辺の農山漁村部。共生しながら魅力的な圏域が作れないかと考えている。そういったものが行ったとなって、前回の会議で多自然型居住の話しをさせていただいたが、都会の人が地方を魅力的に感じる圏域を作れないのか、ということで提供させていただいている。圏域の中で対流を起こそう、という事を書いているが、東京、大阪からの移住の受け皿づくりとしての圏域づくりを意識しているところ。また御指摘いただきたい。

（松永委員）

- ・ 時系列で生活圏に変化が出てくるところなど様々面白い資料だった。生活圏としては不便だが、そういうところに定住が増えていることを図示化されているのが興味深かった。
- ・ 人口の対流と行ったことを考える中で、二つの軸があると考えている。一つは論点整理の（1）の定住。住んで働くこと。都市から農村という対立軸ではなく、農村から農村もあるだろうし、住んで働く「定住」の地域のベクトル。
- ・ もう一つ見落としていたのが、「一日生活圏」というか、「一日交流圏」。都市に日常平日

は働いて暮らしているが、休日は大阪の人が福知山に出かけるとか、よく見られる流行までは行かないが、ちょっとしたブームになっている。ショートトリップ的な行動。

- ・ 住み続けるための委員会なのだが、人口減少の中で定住だけでなく消費生活圏が変わってきていて、単純ではないと思う。先ほど活動格差社会の話はなるほどと思ったが、田園回帰の事象とか、若い世代を追っていくと、島根では高学歴の人が地方に住んで仕事を作りだして地域活動をしたりしている。全体で見ればインパクトは強いが、そういう人が1%でもいれば、という藤山委員がいつも話されている話に通じるところがある。大多数の人はせいぜい車で行く範囲が増えた、という程度かもしれない。
- ・ 地方でよく聞く話は、地方に仕事がないと思われているが、そうではなく、介護職、農業、ガソリンスタンドなどの生活サービスなど、従来高校卒業程度の方が担っていた業種の仕事はあるが、そういう人たちも都市に流れて、仕事があるところに人が来ない。田園回帰の人たちはそういうゾーンではなく、もう少し付加価値が高いところを求めているのが事実。
- ・ 一日交流圏、生活圏を提示していただいてよかった。制度的に整えるというか、農村側からの小さな動きは充実してきているので、そこを制度的に補完できるのか、というところが論点になるのではないか。

(小田切委員長)

- ・ 谷口委員の資料は前半だけだと通勤圏などが広域化したという話のだが、議論を見るとむしろ多様化している、という話。高齢者は引き続き動いていないとか、広域化していく中で低活動な者がいて、ネットや格差が原因であり、単純に広域化しているという見方では間違いであるということ。それが印象に残った。
- ・ 総務省の施策で言えば、津山を中心とした人口5万の定住自立圏ではなく、政令指令都市の岡山を中心とした地方中枢拠点都市へ移行する、という考え方ではなく、むしろ圏域の中にも多様な動きがあり、つぶさに拾い上げることが重要と考えた。
- ・ 広域化という観点で考えるかそうでないのか、という事を議論した方がよいと思います。

(藤山委員)

- ・ そのあたりは先祖返りを感じる。昔の藩、66カ国の国のレベルぐらいに来ているのでは、それは凄くクリエイティブだと思う。あの国というのは、文化的、風土的にもよくできていて、そうしたモノとして捉えることが、一日交流圏的なモノで文化や産物を共有できることが凄いいことと思う。
- ・ それを踏まえ、住み続けられる国土の設計原理が見えてきたのでは。3つほど考えていて多様性、どこでも同じではない、一人勝ちではない。それを認める。次にそれぞれの地域が多獲性。モノカルチャーではなく、いろいろなモノがある。最後に多重性。グローバルの一つの渦だけではやっていけないし、小さな拠点の小さな渦だけでも足りない。その間に地方都市の渦もあり、それが全部閉じてなくて少しずつ役割がある。多重性のモノを作っているのではないか。そこの中にユニットとして、一日交流圏のようなモノが浮かび上がっている構図。多様性、多獲性、多重性、それが相互に補強している設計原理ではないか。

(広井委員)

- ・ 藤山委員と重なるが、どういう観点で整理していくか、一つの軸としてのグローバリズとローカライズという軸があると思う。両者は二者択一のものではなく、何らかの意味で両方のベクトルが進んでいくと思う。軸足としてはグローバル化の先のローカルかと考えている。ローカライゼーションが比重として大きくなっていくと思う。
- ・ 出発点はローカルであってグローバルが出発点ではない。そういう方向性が重要で、あるべき姿を共有化しないと政策がどうあるべきか決まってこない。谷口委員が公共が重要と仰っていたが、私もそう考えている。あるべき姿をどう想定していくかが鍵。
- ・ 政策に関して言えば、都市と農村はある種非対称性のモノがあると考えており、市場経済に委ねていると、放っておけば人は都市に流出してしまうだろう。せっかく田園回帰の流れがあっても離職者が多かかったり、実現していない面がある。都市と農村の非対称性や市場経済に委ねていると、歪みが生じてくる部分があるので、政策で対応していく、それがどうあるべきかは、あるべき姿にかかってくると思う。少々抽象的だがその辺りが重要ではないか。

(小田切委員長)

- ・ 今、広井委員に論点整理いただいたと思う。感謝したい。事務局からは。

(藤井局長)

- ・ 様々御議論いただいた。
- ・ 3点考えた。今後進めていく上でという事で発言させていただきたい。今の計画、消滅市町村や人が減っていくというネガティブな感情があり、それを前提に考えていく必要がある。
- ・ 高度経済成長期がアブノーマルな状態だったと考えれば、そういうことだったと考えて国土のあり方を議論すれば、もっと落ち着いた議論ができるはずだが、なかなかそうはなっていない。
- ・ 集落状況調査について発表させてもらったが、市町村の無居住化の可能性については全体の4.8%で、10年以内の無居住化を予測していたのは0.8%に過ぎません、という発表をしている。我々も分析が足りないが、無居住化したところも今回174集落しか無居住化していない、としている。いろいろ聞いてみれば、団地がなくなったとか、道路の拡張でなくなったとか、今から集落がなくなっていく、という事と現実はほど遠く、むしろ安定していると。高度経済成長期の方が農村から都市に人が流れて集落の消滅はひどかったのではと考えることもできる。今は落ち着いた時代になってきているでしょうと。現にこの調査でも人口が転入した集落は40%もあって、全集落の25%は子育て世代も移住してきている。条件不利地域だけのデータで、これは凄いこと。まず、もうちょっと落ち着いて集落について考える必要があるのではないかと、というメッセージも込めて発表をした。ところが、マスコミの方は消滅市町村がいくつある、という数字の多寡を見て、報道されてしまうところが有り、議論の前提としてミスリーディングではないかと考えている。
- ・ そういう出発点に立って議論を進めていくが、本当にそうなのか。というエビデンスを

集めきれいでないので、きちんと集めてと詰めていく必要。

- ・ 二つ目として、そうは言っても地方の職を支えているのは、通勤も大都市へ行っている。買物だけではない。集落を維持できると言っても職がなければ集落を維持できない。周辺都市とどう関わっているかという事実を踏まえて集落をどう維持するか。分けて議論はできないという話があったが、そこに何のインフラが必要なのか、例えば岡山は町の周辺部に職場があって、道路は放射線状にしかない。通勤に町中を通らざるを得ず、そこが朝晩だけ渋滞してしまう。やはり環状線が必要だと言う話しになったりすることもある。そういう分析もしなくては行けないと思う。
- ・ 三つ目として、そうは言っても転入の可能性はあるというところは何なのかと。ボリュームを見誤ってはいけない。ただ、可能性はそう小さいものではない。その可能性の中で、大きいのは子育てが重要になってきているのではないか。田園の方が良い、都会にない価値、そこで働けるやり方。副業化を働き方改革でもやっているが、最初から前提にするように制度的な仕組みとか、プロモーションをやるとか、本気でやらないといけないところがある。半農藩 X のようなことを言うが、そう言ったら農業をちゃんと研修させて上げたい。ちゃんと 5 年くらい研修させるとか、そういうところが働き方改革でもあまりできていないかもしれない。地図に落としてそういうことを考えたときに働き方改革や子育て改革のようなことをどうやって行けば良いのか、可能性のところには光を当てていくべきではないか。
- ・ そのあたりは今回頂いた議論も踏まえて次回以降に検討していきたい。
(小田切委員長)
- ・ 時間となったので、今回はここで終了します。

(終了)